

所属・資格 国文学科・助手

申請者氏名 鈴木 雅裕

研究課題		『古事記』を中心とした上代文学の研究
報告概要	研究目的 および 研究概要	『古事記』を主な対象として、次に挙げる二つの方向から研究を進める。一つ目は、『古事記』自体の分析であり、歴史がどのように編まれるのかを明確にすることが目的である。それは、完成した作品における構造を対象とするのではなく、どのように歴史が生成されていくのか、という視点からの分析となる。本年度は中巻を対象にし、歴史生成の過程を明らかにすることを課題とする。その成果は、古事記学会・上代文学学会等の学会発表及び学会誌・学内誌への投稿を通じてかたちにしていく。二つ目は、作品享受の問題だが、国語教科書における教材化や研究史の歴史化という点からその問題を考えてみる。おもな活動は研究会での報告になるが、その報告内容も随時活字化する予定である。
	研究 の 結果	1回の口頭発表と4本の論文投稿(以下、研究成果の通し番号による)が、本年度の主な研究成果である。 口頭発表では、『古事記』下巻の雄略朝を取り上げたものだが、その歴史叙述における様相を原コンテキストを視座として考察を加えたものである。 投稿論文①は、従来、矛盾とされてきた『古事記』系譜の見直しを図るため、テキストの用例及び同時代の文献・金石文との比較を通じて、その質を明らかにした。③は、口頭発表①の一部を活字化したもの。あまり問題視されることのなかった箇所を俎上に挙げ、その点に『古事記』のテキスト性を考究する糸口があることを明かした。 ②・④は本年度から着手した『古事記』上巻の注釈的作業で、本学教授の梶川信行氏との共同作業を活字化したものである。本学学生に向けて執筆したものであると同時に、先行する研究史の問題点を考え直したものである。
	研究 の 考察 ・ 反省	口頭発表については、学会のテーマに沿って研究対象とするテキストの分析を行ったが、従来論じられてこなかった部分をあらためて考えるきっかけとなった。また、その一部を活字化することもでき、本年度の研究目的を進めることができた。学生に向けて執筆した『古事記』の注釈についても、学内誌で連載を始めることができたことは、大きな成果だと思われる。 その一方で、作品享受の問題を考究することは手薄になったところがあり、活字化に至っていない。また、中心研究の体系化という点でも、本年度の研究で論じるべきことが多く見つけた。次年度は、そうした欠点を埋めつつ、今まで論じてきたことをまとめる作業を行いたい。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 【発表】 ①聖なる空間の創出—『古事記』における雄略朝—(古代文学学会・2018年8月22日・ちすじ旅館) 【論文】 ①『古事記』景行記系譜の諸相—倭建命関連の名称表記・訶具漏比売の世代認定を例として—(『語文』162・日本大学国文学会・2018年12月25日・16頁～28頁) ②教室で読む古事記神話(一)—天地初発から神世七代まで—(『語文』162・日本大学国文学会・2018年12月25日・49頁～62頁)*梶川信行氏と共著 ③『古事記』における志幾大県主家の表象—「御舎」の原コンテキストを視座として—(『古代文学』58・古代文学学会・2019年3月1日・46頁～57頁) ④教室で読む古事記神話(二)—淤能碁呂嶋から不入子之例まで—(『語文』163・日本大学国文学会・2019年3月25日・62頁～75頁)*梶川信行氏と共著	